

# 「真理の柱であり土台である教会」 “The Pillar and Foundation of the Truth”

## テモテへの手紙― 3章14～15節

聖学院大学 人文学部チャプレン エバート・D・オズバーン

6年前、カリフォルニア州ヴェンチュラ市にあるバーナ・リサーチ・グループが、“アメリカ人が信じていること”について調査をしました。予想外に、調査に応じた66パーセントが、絶対的真理というものは存在しないと答えました。また、18才から25才の若年層の30パーセントに満たない人々は、絶対的真理を信じ、その他の多数派は、次の様なことを言い掲げています。“自分が信じていることは何でも真理である。”“もし、真理というものがあるならば、人はどうやってそれを見極めることができるか。誰も証拠を持って明確に表わすことはできない。”あるいは、“絶対的真理を信じている人達は愚か者だ。”とも言っています。

もし、日本や、他の先進国でこれと同じ様な調査が行なわれたとしたら、おそらく、上記と似た調査結果が得られると思います。

残念なことに、現代社会のすべての核心にポストモダニズムの思想があると私は思います。(残念なことに、現代社会の核心の至るところにポストモダニズムが大きく影響を及ぼしていると私は思います。)アメリカ人の神学者 J・P・モーランドとウィリアム・レーン・グレッグによると、ポストモダニズムは、知識というものを再解釈するものであり、また、文化の相対性の形式、つまり、現実(実存)、真実、理性(道理)、価値、言語学上の意図、また他の様々な概念などを表す(示す)ものであると言っています。(モーランド&グレッグ、『Philosophical Foundations for a Christian Worldview』(クリスチャンの世界観の為の哲学的基礎)、2003、p.145)

ポストモダニズムの世界観においては、知性は意志と、動機は感情と、道徳は相対論と置き換えられ、また、実存・現実そのものは、社会的構成概念とされています。

実際に(本当に)ポストモダニズムが導き行き着かせるものは絶望です。この真実を(これを)代表する一つに、アメリカの車のバンパースティックの一節があります。

「現実をあきらめた。今は、良き幻想世界を探求中。」というものです。

ポストモダニズム(思想)の失敗の根本原因は、特に、宗教的、また、霊性における絶対真理の概念を否認した(拒否した/捨てた)ことにあり、私は考えます。

実際にこれは、大きな問題ではありますが、現代社会がかかえる数多くの問題の根本的理由の一つが、多数の人が真理について明確な見解をもっていないという事実にあると、多大に言及することができるのではないかと思います。もし、絶対的真理が存在しなければ、その社会には、堅実な土台はありません。

「われわれは次のことが自明の真理であると信じる。すべての人は平等に造られ、創造主の神によ

って一定の譲ることのできない権利を与えられていること。その中には命、自由、そして幸福の追求が含まれていること。」(アメリカの独立宣言、1776年7月4日)

しかし、もし“真理”が存在しないとすれば、“全ての人は平等に造られ”“万物の創造主、神によって、人は侵すべからざる権利を与えられている”こと、また、“命、自由、そして幸福の追求の権利”は、全く真実なことではないことになります。

この一つの例からも、絶対的真理は存在しないということを信じるのが、どんなに危険なことであるかがわかります。

勿論、聖書は絶対的、不変的、道徳的真理が存在することを明確に人類・私たちに示しています。人間がどう考察しようとこの絶対的真理が、神の神格である性質なのです。

イエス・キリストは、ヨハネの福音書14章6節bで、宣言しています。

「わたしは道であり、真理であり、命である。」

紀元33年の4月、ポンティオ・ピラトの前で行なわれたキリストの裁判の中で、イエスは、神の真理を人間に明確にすることが、御自身が地上に来られた理由の一つであることを宣べられました。

「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」(ヨハネによる福音書18章37節b)

そこで、ピラトはイエスに聞きました。“真理とはなにか？”これは、現代人の問題がさして現代的な新しいものではないことを示しています。二千年前のこのエリートであるローマの指導者も絶対的真理を信じませんでした。

人知を越えた所で、真理は存在し、それは神の内に、また、神を通して見出されます。前に述べたように、真理の一つの源泉は、神の御言葉です。ヨハネによる福音書17章17節ではイエスが父なる神に祈られた時、「あなたの御言葉は真理です。」と言われ、また、詩編119編160節では、神について書かれています。「御言葉の頭はまことです。あなたはとこしえに正しく裁かれます。」

神の永遠の真理を知り、信じ、そして信仰を行動に移すことが、霊的自由を得る鍵であることは、イエスが、ヨハネによる福音書8章31～32節において言われています。

「イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。『わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。』」

これは神の真理の大いなる力を示しています。神の真理のただ一粒の種でも人生を変える力を持っているのです。

真理の力について類推によるある一つの話があります。それは、カリフォルニア州モンテレーの町の近くの海岸に面する大きな岩と崖に生殖するイトスギの話です。このイトスギの木は、岸壁の真ん中で成長しています。その一本一本のイトスギのそれぞれの種は、岩々のふところに落とされ、大自然の神秘の力によって雄大な木となって岩の間をぬって、真っ直ぐに育ってゆくのです。そして、その美しい姿はカリフォルニア海岸線の景色を一層美しいものとしています。

教会と聖学院のような教会系列下のミッションスクールに託された宣教の鍵の一つは、人々の心と精神に神の真理の種を蒔くことにあり、そして、その力はその種により、知られ、種により、現わされるのです。

神の絶対的真理を教え、説教することが教会とキリスト教の教育施設の第一の宣教の一つである

のですから、真理を求めている人々、また、真理が本当に存在するのか、しないのかが分からない人々がたくさんいるこの世の中で、極めて重要な役割をもっているのです。

この重要性を誇張しすぎることは決してありません。また、今日読んだ聖句にも明確に示されています。「神の家とは、真理の柱であり土台である生ける神の教会です。」(テモテへの手紙一 3章15節 b)

週に4日もつ私たちのチャペルアワー、そして、毎日曜日にもたれる聖学院教会は、神の家、生ける神の教会、真理の柱であり土台である教会です。

礼拝堂が建てられて、このちょうど10年をふり返ってみる時、私たちのチャペルアワーで、あるいは、日曜礼拝に集った述べ何千人という人々のことを私は思います。そして、ここで教え伝えられた神の永遠の真理とその真理に(魂を)動かされた全ての人々の人生を思います。

ある人々は深く影響を与えられ、クリスチャンとなり洗礼を受けられました。キリスト教センターの記録によれば、この10年間に少なくとも29名の聖学院大学の学生が在学期間にクリスチャンになりました。

この数字は、洗礼の場所と日付けを学校に報告した学生の記録ですから、他にまだ多くの方々が考えられると思います。それだけではなく、学生以外の多くの方々が、以前は緑聖教会と呼ばれていたこの聖学院教会で、この10年間に洗礼を受けられました。さらに、将来クリスチャンになれる方々がおられるのは確かです。神の真理の種は蒔かれ、育まれているのです。

これは、過去10年のことですが、この聖学院のキャンパスは、1967年に女子聖学院短期大学が創立されて50年近くになります。もちろん、聖学院大学と、法人聖学院のすべてを考えれば、私たちの学院の歴史は、112年にさか上ります。聖学院の働きにより、クリスチャンとなった何千人もの人々のことを考えてみてください。彼らにとって、神の絶対的倫理(道徳)真理の教えは、永遠の重大価値であるのです。

そして、また、聖学院に携わった人々の中でまだ正式にクリスチャンとなっていない方々の内においても、ここで伝えられた真理は彼らの人生で非常に重要なものであると信じます。これが神の言葉の力であり、神はイザヤ書55章10～11節で約束されています。

「雨も雪も、ひとたび天から降れば／むなく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ／種蒔く人には種を与え／食べる人には糧を与える。そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も／むなくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ／わたしが与えた使命を必ず果たす。」

とかく忘れられてしまうことですが、今日は、この年月を通して私たちの小さなキリスト教主義の学院において実証的な影響を成し続けられていることを覚え、神に感謝を捧げたいと思うのです。もちろん、今日ここに集われている方々の関係されている全ての教会にも同じことが言えます。私にとって、はるかに重要な遺産は、私たちが奉仕する学校や教会で神の真理の教えを生かして健闘されている人々です。

19世紀の福音伝道者D・L・ムーディーが言った次のことに、私は深く共鳴します。

“私が死んだ後に望む記念碑は、救われた元罪人が二本の足で世の中を歩き回り、イエス・キリストの救いについて証しをする、生きた記念碑です。”

私たちのこのミッションスクールや、すべての教会で何年にもわたり成されてきたことは、非常に多くの人々を救いの道に導くことになり、あるいは、何らかの助けをある人々に供給できたに違いありません。それらの人々、そして、今日ここにいらっしゃるクリスチャンのリーダー、また、教育に携わる皆様、神の恵みと祝福を祝う理由であります。

とにかく、聖学院大学、法人聖学院、また皆様のすべての教会において多くのことが成されてきたのですが、これからはしなければならぬことがたくさんあります。日本のクリスチャン人口は、今も1パーセントと、停滞が何年も続いています。私たちは大きな挑戦に立ち向かわされています。

この挑戦に加え、すべての真理が相対的であるとするポストモダニズムは、キリスト教伝道のもう一つの壁となりました。

けれども、私たちは勇気を持ちましょう。私たちの仕事・使命は社会にとって正に命にかかわるものであるという最高の確信を持ちましょう。

“真理を証しする”イエスの任務(使命)を続けましょう。そして、私たちの教会、また、この学院は“絶対的真理の柱・土台”としてポストモダニズムの社会の中で仕え働くものであるという事実、喜びを持って応じようではありませんか。

2015年6月24日 2015年度教会と聖学院との懇談会開会礼拝